広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	ヴァレリーにとって「始まり」とは何か
Author(s)	浜屋, 昭
Citation	フランス文学 , 20 : 13 - 23
Issue Date	1995-06-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00041003
Right	
Relation	

ヴァレリーにとって「始まり」とは何か

浜　屋　　昭

ポール・ヴァレリーは「始まりから始めること」に対する自分の執着について，カイエにおいて何度か言及している。作品においても，《Au commencement・・・》のステレオタイプが散見される。[1] また，特に断片的な小品文に，Réveil, Matin, Aube といったタイトルが目立って多く，なによりもカイエはヴァレリーにとって，まだ「最初の状態にあり，よく目覚めていない(C.I,7)」観念を書き付ける場所だった。それが早朝の日課であったことを考えれば，目覚めについての記述，また朝の時間への言及が多いのは当然とも言えるが，注目すべきは，そこでは，この詩人の直感的感想と哲学的内省が，さまざまな問題に関連して縒り合わされているということである。

1910年頃を境に，ヴァレリーのカイエに，《commencer par le commencement》，《partir de mon commencement》というような記述が現れ，それは彼の希望であり性癖であり，偏執であると自らによって書かれている。1939年の講演ではこのように語られている。

> Quant à moi, j'ai la manie étrange et dangereuse de vouloir, en toute matière, commencer par le commencement (c'est-à-dire, par mon commencement individuel), ce qui revient à recommencer, à refaire toute une route, comme si tant d'autres ne l'avaient déjà tracée et parcourue...
>
> Cette route est celle que nous offre ou que nous impose le *langage*. (Œ.I,1316)

ここには，これから扱われるべき多くの課題が含まれている。「始まり」に関する諸問題。カイエにおけるヴァレリーの重要な問題であった反復(RE)，そして言語の問題。こうしたテマティクな研究にとって，ヴァレリーの作品およびカイエ全体にわたり，その材料は不足しない。ある一つのテーマにそってヴァレリーを読み替える以上のことにはならないとしても，敢えて「朝－覚醒－始まり」を本論の軸とするが，当然その中には数多くの，それぞれに詳細な検討を要する問題が含まれる。それゆえ，ここに示すのはひとつの

研究プラン，枠組みとなるべきものである。

1．朝の想い－創始感覚

序文に書いたように，ヴァレリーのさまざまな書き物にわたって，「始まり」の時間への言及が存在するが，特に注目すべきは，カイエに見られる多くの韻文または散文で書かれた詩，あるいはその素材のごときものであろう。[2] そこには，あらゆるものに先立って行動し，自己の意識とともに世界が把握されていくという，ヴァレリーにとっての特権的時間，すなわち覚醒の時間がある。夜の名残を強く残す頃だけが満足させる「世界の創始感覚」が，粗削りな文章の中に直接に示されているのを，我々は観察することができる。

Avant le commencement－
Avant la Création－
La puissance d'abord se découvre－ [・・・]
Comme pour établir le monde et l'espace où l'on va se mouvoir et choisir un chemin－
Froideur et simplicité de cette aurore－oraison. (C. Ⅱ,1271-1272)

Ce moment est au-dessus de *tous* les autres car il sort du sommeil－
[・・・]
L'espace engendre et résorbe *toutes les formes* ; *Tous les édifices possibles* sont dans la pénombre de mon pouvoir.
Je suis *avant* 《 *Toutes choses* 》; mais *après* ce qu'il faut pour qu'elles soient.
Je suis seul et tête-à-tête avec *tout ce qui n'est pas* en pleine action.
(C. Ⅱ,1302-1303)

こうした時間にあっては確かに，リシャールのような批評家をして，「作品に先立ち，作品をはらんでいる沈黙から作品が生まれてくる，文学的創造の最初の瞬間」[3]と言わせるような，豊かな虚構性がある。認識する主体の欠如のために，何ひとつ描き出されていない，全てのものに先行する観念上の瞬間を，ヴァレリーもまたここで感覚的にとらえている。覚醒の瞬間が，何よりも自己意識の誕生あるいは再帰の時間であるなら，考える自分を考え得るという思考連鎖の始点は，唯一この時間によってのみ具体化できると考えてい

るのである。

> Le problème d'origine suppose naïvement que l'on se place, *soi*, avec des yeux, et un intellect, et un langage etc., en un lieu et dans des conditions où le commencement va se produire —
>
> Que de choses incompatibles accumulés !
>
> Un vivant-pensant, avant la vie—Un pensant-parleur avant tout langage ! — Un esprit qui attend le commencement parce qu'il connaît la suite —Il attend la Création du monde et de l'homme pour voir comment Dieu ou on s'en tirera. (C. I ,757-758)

詩人における「最初の瞬間の宇宙」を主要な探求テーマとしていたプーレは，ある対象について思考するのではなく，考えるということ，あるいは考える主体そのものを考える，すなわち主体＝対象という，ヴァレリー的思考態度に言及し，その特権的舞台として，覚醒の瞬間を主題化した。その瞬間とは，「夜の夢を捨て，未だ昼の事々に囚われておらず，純粋な主体として自己自身の意識を自由に取る，目覚める存在」[4]のそれである。「私は，泳ぐものが溯るように目覚める(C. II 31)」というヴァレリーの言葉をひいて，プーレは，ヴァレリー的存在というものは，浮かび上がる泳ぎ手のごとく「あらゆる深さを奪われているかのように，覚醒の瞬間へ抜け出る」と書く。こうした立場は，この章における我々の論旨に完全に合致するといってよい。[5] 事実，ヴァレリーは，この覚醒の時に，「表層の深さ＝詩」を感じている(C II ,1285)。常にそこは，表面として感得され，その下部には睡眠の世界がある。何よりも先立つという現在性こそが，覚醒の瞬間の特権であるが，実際にはそれは，「始まり以前」というものを探求しようとする意志とともにしかない。その意味で「始源の問題」は常に言語の問題となる。

「作品とは生産する精神であり」，また「詩作品とは詩作品の制作行為にほかならない(Œ.I,1349)」と言うヴァレリーにとって，始まりの時である朝は，作り出し，作り出される時間，そして何物にせよ作り出されるであろう可能性の舞台である。マラルメ以降，あるいはロシア・フォルマリストたちの積極的な理論化以降，詩的言語の特性は，その可能態としての性質に求められる。それは「言われたこと」であるよりも「言おうとする瞬間」としてとらえられ，メルロ＝ポンティが，マラルメとランボーに共通する言語への信頼について指摘したように，「《明証性》の統制から言語を解放し，新しい意味の諸関係を作り出し征圧する」[6]ため，「詩の言語は発生期の言語なのである」。[7] ヴァレリーは同様のことをコレージュ・ド・フランスの詩学講義で次のように語っている。

La formation de figures est indivisible de celle du langage lui-même, dont tous les mots 《 abstraits 》 sont obtenus par quelque abus ou quelque transport de signification, suivi d'un oubli du sens primitif. Le poète qui multiplie les figures ne fait donc que retrouver en lui-même le langage *à l'état naissant.* (Œ.I,1440)

こうした観点において，ヴァレリーの考え方は，意味と自我との発生のプロセスを考察テーマとしつつ「世界と歴史との意味を，その生まれ出でんとする姿において(à l'état naissant)」とらえようとする，現象学的な意図に類似する。[8] ヴァレリーにおいて覚醒の瞬間への言及が示唆しているのは，まさしく詩的言語の探求であり，またその言語主体の生まれる所の探求でもある。

「目覚めほどわたしにとって刺激的なものはない」という文章が，この詩人の死の前年に書かれる。自己発生のこの一瞬においては，「人が，まだそうであるところのものではなく，ほかのものに再びなり得るようなそうした瞬間があるかのように」感じられると。[9] これがヴァレリーの，覚醒の瞬間に対する最も根本的な認識であろう。目覚めの際のほんのわずかの時間に，「自己の純粋状態」というものが観察され，この裸形の現在点は「これから在るところのもの，これから成すところのものを包みこむ(C.Ⅱ,150-151)」。それはその過去と未来の双方の始点となるのである。その瞬間はまだ現実のさまざまな要請に答えていない。だからこそ「目覚めは一種の回答である－［・・・］全体を誘発あるいは生産する回答である(C.Ⅱ,156)」。ヴァレリーが，テクストとしての詩に付与していた可能性とは，さまざまなつながりの，唯一の連結点でありえるということであり，「今在る声と，次にやってくる声，やってこねばならぬ声との間の連続的なつながりを要求し，またそれを生ぜしめる」ものである。すなわち言語，あるいはテクストの現前だけが，「生成の諸条件」を握っている(Œ.I,1349)。

2．夢の方へ

象徴的にも未完成のまま終わった『アガート』は，書くことと夢みることという，両立不可能な位相間の「臨界状態 état critique (C.I,1083)」の探求である。理論的な面では，ヴァレリーはこうした位相の違う状態の移行，連続，継起をあらわすシステムへの関心を，数学と熱力学の類似概念に重ねながら高めて行くこととなる。[10]

そして『アガート』において問題となるのは，始まりの探求ではなく，その消失なので

あり，その展開においては，深化や起源への溯りは否定され，むしろ一つの形式から，別の形式へ移行し，「新しい諸形式と最初の形式との関係を問うことは絶えず許されている(Œ.Ⅱ.1389)」。それは「朝の視線」であり「天使の視線」である統覚的主体＝語る主体をもたない，「今思考するものがやがて思考するものへと自壊する」ような特殊な時間として語られる。[11] この作品に特徴的なのは，「解放」「漂流」「拡散」「無秩序」というようにちりばめられる，暗闇の中での「無限の分割」のイメージである。夢の状態に対する研究などから考えてみると，単に語の多義性を獲得させるだけでなく，むしろ多義であり得るという拡散的可能性を獲得することが問題なのであり，「自己のうちに，わたし自身の力，あるいはそれを待っている何らかの拡散を引き付けるための，一つの無秩序を保持している(Œ.Ⅱ,1393)」とヴァレリーは書いた。[12]

ヴァレリーは，この奇妙な散文作品によって，覚醒と眠りの世界のせめぎ合いのドラマを描いているように思われるが，それは，書き出すことへの意志と，そのことによって不在化する何らかの状態との葛藤でもある。そして以下のように書かれるのは，目覚めゆくものの知覚ではないだろうか。

> Tu te connais à reculons. Tu transportes *en arrière* un pouvoir, une sorte de discernement ; et n'étant éclairé que dans la direction opposée à ta route, tu divises ce qui est accompli, tu n'agis que ce qui est achevé. (Œ.Ⅱ,1391)

いわば，目覚めるものは，始まりのない拡散的世界から，「始まり」を作り出してしまったものであって，自己の発生の現場へ遡行しようという意志をもちつつ，そのために，そこから遠ざかるものである。それはまさに「後ずさりで自己を認識する」のである。

ヴァレリーはまた，前章に述べたような「泳ぐ人」の比喩のもと，海底の斜面に沿って陸へと歩きだすイメージに，目覚めて行く状況を重ねてもいる。「彼はその斜面をのぼっていく。目覚める人は自分の夢の領域の中に何か新しいものを見いだす。それはやがて彼の過去の生活の全貌となるべきものである。ただ，一瞬の間，それは新しいのだ(C,Ⅱ,73)。つまり，目覚める存在は，プーレの言うように夜と決別したのではなく，むしろ夢の領域を新しくする。「溯ることそのものが，覚醒の特性である(C.Ⅱ,31)」。記憶が，持続する意識を認識させる前に，前へ向かいながら過去を新しくする一瞬がある。

夢＝睡眠時と，覚醒時との境界，「臨界」，そこにおいては「二つの王国が上下で通じており，自分はただ一瞬時の領主」なのであり，「実体無き領主ではあるが，しかし賛嘆すべき一瞬時（C.Ⅱ,1279)」がその領土である。書かれることの不可能な相と書かれたものによってしかあり得ない相，二つの位相間を連結しようとする詩人の幻想は，主体の意

識の目覚めとともに世界の認識が始まるこの一瞬においてのみ感得される。

言語化される以前の世界というものは，ヴァレリーも理解していたように，それが不在化されていることを示す言語表現によってしか存在し得ない。夢の探求においても同様のことが言える。ヴァレリーの膨大な夢の研究の多くが，目覚めへの言及とともになされていることは注目に値する。夢は確かに経験されたことではあるが，回顧的あるいは解釈的にしか語ることはできない。「夢は眠りのもとにおいてしか存在しない。それは覚醒状態では受け入れられない(C.I,1083)」が，同時に，それが認識される場合「夢は覚醒時に存在する(C.Ⅱ,185)」という逆説が成り立つ。「夢とは目が覚めてから超組織的なものを組織しようという試みである」とヴァレリーは書き，「そしてこのことが本質的に不安定なもの，少しでも固定すればそれによってその本質が奪われてしまうものに対して，表現を，すなわち固定化に適当な言葉を見つけるという驚くべき問題を生み出す(C.Ⅱ,139)」と続けている。問題は，意識にとっての夢とは，「エクリチュールに外在することよって，取り戻される」[13]しかないというところにある。そしてその意味では，目覚めこそが夢の始まりでもあると言うことができるだろう。

ヴァレリーにおける目覚めは，昼や夜，覚醒時と睡眠時といった図式的な対立のどちらかへ向かうものではなく，むしろ，そうしたベクトル性を無化することによってこそ，特権的たり得ているのである。

3．全体の萌芽状態

> Au réveil, [・・・] Ici, unies au jour qui jamais ne fut encore, les parfaites pensées qui jamais ne seront. En germe, éternellement germe, le plus haut degré universel d'existence et d'action.
>
> Le Tout est un germe－le Tout ressenti sans parties－le Tout qui s'éveille et s'ébauche dans l'or, et que nulle affection particulière ne corrompt encore.
>
> [・・・]
>
> Au réveil il y a un temps de naissance, une naissance de toutes choses avant que quelqu'une n'ait lieu. (Œ.Ⅱ,658-659)

こうした記述に見られるとおり，ヴァレリーは，覚醒の時間を一種の胚の状態と考えている。カイエにも多く見られるように，生誕の場，最初の瞬間として覚醒が考えられているとすれば，その象徴的価値とは，胚種が持つ拡張的な力である。germe, embryon といった語に対するヴァレリーの関心は，明らかにこの点にある。

Ce que l'on voit alors [à l'aube] prend valeur symbolique du total des choses. Un paysage quelconque est un ∂U [C'est-à-dire une partie infinitésimale de l'univers. (note de Pléiade)] —Il *cache ce qu'il implique, exige.* (C.Ⅱ,1285)

こうして目覚めの瞬間は，ヴァレリーの詩学においても重要な位置を占めることになる。唯一始まりを演出することによってのみ，詩は「無限の展開を触発するという限られた目標をもつ行為の結果となる」[14]。

ヴァレリーは，詩の特徴を「宇宙の感覚」と呼んだことがある。「夢の宇宙」にも酷似するというその感覚については，以下のように解説されている。

J'ai dit: *sensation d'univers*. J'ai voulu dire que l'état ou émotion poétique me semble consister dans une perception naissante, dans une tendance à percevoir un *monde*, ou système complet de rapports, [・・・] (Œ.I,1363)

ここに，全体を含み得る一点というマラルメ的テーマが現れてくる。始まりを暗示しながら，常に終わってしまったものとして存在する作品を，発生期の宇宙として構想すること。これは，ヴァレリーに見られる，完成と固定の嫌悪，出来上がったものとしての作品への無関心を説明するものである。詩人としてのヴァレリーは，胚種的瞬間の保存・延展を企画することになろうし，その活動とは，終わりを避けるための仕事となるであろう。

4．結論にかえて；作品へ— *Charmes* の構造について

ヴァレリーは，カイエにおける自分の作業はペネロペの仕事である，と書いている。それは「日常言語から出て，またそこへ戻る(C.I,11)」仕事であると。そのとき考えられているイメージは，一枚の面を垂直両方向に際限無く行きつ戻りつする織物の作業であり，その面において残される活動の痕跡＝刺繍である。ペネロペの仕事とは，まさに終わらないことを目的とした仕事であり，常に始まりから始めるというヴァレリーの願望に，毎朝の覚醒による自己意識への再帰が答えている。

Réveil. Pénélope Sisyphe. Réveil de Pénélope

Tous les matins, l'être Pénélope refait la tapisserie du Moi que le sommeil a

défaite — et dont le rêve a brouillé les fils. (C. II, 112)

一点においてすべてが示されるという展望においては，始まりという概念は，結果としてのある状態に媒介されたものであるしかない。したがって，その発展，プロセスは循環的なものとなる。それゆえにヴァレリーは，「作品そのものを生じさせたところのものを生じさせる(Œ. II, 1350)」ようなものとして作品をとらえていた。[15] 意味や価値というものが，遡及的な解釈によって付与されていくとしても，作品の形態そのものは，始まりの零度を動かない。始まりと結果とは，同じものとして内包されていなくてはならない。

Représenter l'être par cycles fermés — par systèmes de systèmes dont l'évolution est du zéro au zéro. (C.I,996)

ゼロからゼロへと移行すること，始まりから始まりへ至る閉鎖系 cyclose を構成すること。覚醒と入眠の「サイクル」については，既に多くの言及があるが，[16] そこで重要なのは，常に「最初の状態に再帰する(C.I,887)」ということである。

ここで具体的な分析を行うにはあまりに大きな作業となろうが，我々は今や，ヴァレリーの詩集『魅惑』を，この始まりのテーマにそって読み解くことができる。すなわち，結果が始まりへと至る cyclose が，導きの糸として与えられているのである。その概略のみを示そう。

『魅惑』は，7または8音節10行9節の二つの詩に挟まれている。「曙」と「棕櫚」である。これらは本来同じ一つの詩として構成されたもので，それを，言ってみれば折り畳んだ上下の2枚として，その間に諸詩篇が挟み込まれているという体をとっている。[17] 「曙」第1章と「棕櫚」最終章を，やや乱暴に図式化すれば明らかなことだが，この2枚の表紙の意味論的な流れは，詩人の目覚めの情景に始まって，果実の放擲に終わる。獲得された詩のイメージが果実に重なるがゆえに，それは「ゼロからゼロへと移行するサイクル」となり，ペネロペの仕事を暗示しているのと同時に，作品全体を始まりとして機能させたいという構想の現れでもある。さらに言えば，このテーマにとって極めて示唆的なタイトルでもある「曙」は，その意味構造を『魅惑』全体に対して予言的たることで，終末を始点において示す役割りを果たしている。[18] かくして構成された作品は，ヴァレリーのねらいどおり，作品の生まれた場所，その起源へと人を帰らせようとし，そのことで自己の未来を獲得することになろう。

前述のとおり，メルロ＝ポンティのいわゆる「世界を顕わしめるもの」としての現象学

は，「限りなく自己自身に立ち戻り，終わりなき対話，終わりなき省察となる」だろうし，それが「いまだに未完成であるという事実，いつも最初からやり直すというその態度は失敗のしるしではない」と書かれ，[19]「棕櫚」最終章が語っているように，ヴァレリーにとってもまた，果実の放擲はその過程の空費を指すのではない。「繰り返すことは，思い出すことではない。それは行為すること(C.I,1228)」である。それは終わらせないために織物をほどくペネロペの仕事，あるいは終わらないことを課されたシシュポスのそれであり，ヴァレリーにおいて構築の概念は，意図そのものと等価のものなのである。

結局のところ，二つの違ったレヴェルで曙光性がヴァレリーのテクストを覆っている。ひとつには，作品の舞台としての「目覚め」，何らかの主体によって体験され，描かれる朝であり，もうひとつには，作品自体が働きかけ，示唆する受容行為の総体に対して，その作品の立場たる胚種的役割において。

註

本文中，引用に付した略号は以下のテキストとし，アラビア数字はページ数を示す。

Œ.I, II : Paul VALÉRY, *Œeuvres I, II*, Gallimard, < Pléiade >, 1957, 1960

C.I, II : Paul VALÉRY, *Cahiers I, II*, Gallimard, < Pléiade >, 1973, 1974

1) Au commencement fut la Surprise (Œ.I,337 ; これはただちに，Éveil et Surprise —Type formel de commencement.(C. II ,126)という文章を思い起こさせる。)と書き始められるときもあれば，Au commencement était la Fable (Œ.I,394), あるいは Au commencement sera le Sommeil (*Alphabet*, A.Blaizot, 1976.) とも書かれる。

2) 厳密な定型詩を完成作としていたヴァレリーにとって，当然これらは，ほとんどが素材の段階であり，あるいは詩人としての朝の印象を綴ったという程度のものであるが，我々はプレイアド版カイエにその一部が Poèmes et P.P.A.の項目でまとめられているのを見ることができる。また，それらのいくつかは，*Poésie perdue*, *Poésie brute* として，修正の後発表されている。この両者は，その内容から見れば，ほとんど「朝の変奏曲」とでも言えるようなものである。

3) Jean PIERRE-RICHARD, *Poésie et profondeur*, Seuil < points >, 1976, p.9

4) Georges POULET, *Entre Moi et Moi*, Corti, 1977, p.115

5) *Ibid.*, p.116 : 作品なり思考なりが懐胎された地点への信頼と，その発展的プロセスを

再び生き直すことの意志は，プーレにおいてやや無邪気なほど強固なものである。また，この点でプーレのヴァレリーに対する視点は，ランボーに対するそれと同様であるが（参照：池田正年・川那部保明訳，『炸裂する詩』，朝日出版社，1981），次章以降に述べるように，ヴァレリーの「覚醒」は決して「決定的に新しい朝」でもなく，目覚めて行く方向にのみ向けられたものでもない。

6) Maurice MERLEAU-PONTY, *Signes*, Gallimard, 1960, p.295

7) 水野和久，『現象学の射程』，勁草書房，p.103：6)の引用も同書。

8) M. MERLEAU-PONTY, *Phénoménologie de la perception*, Gallimard, 1945, p .XVI

9) *Paul Valéry vivant*, Cahiers du Sud, 1946, p.276

10) Cf. 金山英二郎，『ヴァレリーとポテンシャル』，勁草書房，1992

11) Œ. II ,1389. この作品全体が，そうした無秩序な観念継起の体をとることによって，夢の状態に接近している。主体の連続・対話的様相については，拙論「ポール・ヴァレリーにおける対話の様相」(『広島大学フランス文学研究12』)で既に触れ，それらを上から眺める，l'étrange regard du matin についても，次のものに指摘がある。Nicole CEREIRETTE-PIETRI, Au commencement sera le Sommeil, in *Cahiers Paul Valéry 1*, Gallimard, 1975, p.218

12) これは，デリダがマラルメ読解から導き出した「散種構造 dissémination」を想起させる。それは，起源への問いかけと，そこへ問おうとする行為そのものへの省察とを，デリダ特有の語義の惑乱法で表した概念である。すなわちギリシア，ラテン双方の語源による「意味」と「胚種・起源」を音の類似によって関係づけることで，網目として捕らえられる構造的な意味論の解体，起源の分解を示す。それはまた，ここでの論旨に示唆的なことだが，「意味〔sens〕の問題圏と生殖〔génération〕の問題圏を関連づける」。(『ポジシオン』，青土社，1992，p.216） Cf. J. DERRIDA, *La Dissémination*, Seuil, 1972

13) Maurice BLANCHOT, Rêver, écrire, in *Amitié*, Gallimard, 1971, p.165

14) 清水 徹訳「芸術についての考察」『ヴァレリー全集５』，筑摩書房，1967, p.217

15)「結果としての起源」というこうした見方を，ブランショはヴァレリーの教訓に学んだと言い(*Part du feu*, Gallimard, 1949, p.252)，デリダは，ヘーゲル的命題として確認している。(ジャック・デリダ；佐々木明訳「痛み，泉ーヴァレリーの源泉」『筑摩世界文学大系56:クローデル・ヴァレリー』,1976, p.497)

16) cycle, cycle fermé はカイエに頻繁に現れる概念であり，研究書の言及も多いが，特に次のものを参照。 Nicole CEREYRETTE-PIETRI, *Valéry et le Moi*, Klincksieck, 1979, p.61-64 ; Judith ROBINSON-VALÉRY, *L'analyse de l'esprit dans les Cahiers*

de Valéry, Corti, 1963, p.64-67

17) こうした構造に関して，リーマン面やマラルメの書物からヴァレリーに得られた着想については既に述べたことがある。(「ポール・ヴァレリーにおける対話の様相」『広島大学フランス文学研究』12号)

18) Cf.「ポール・ヴァレリーに見る構築の意志」同上10号: 詩の意味解釈の許容度の広さは，テマティクな研究を安易なものにしてしまう。ゆえに，この点についても詳しい分析が必要となるが，ここでは一部についてのみ触れた。

19) *Op.cit.*, *Phénoménologie de la perception*, p.XVI